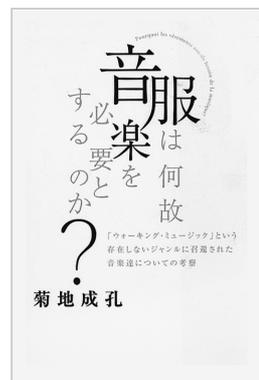


『服は何故音楽を必要とするのか?』

菊地成孔 著 INFAS パブリケーションズ 2,000円(税込)

専門性による境界を超える力。

会員 栗林 拓郎 (61期)



ジャズサクソプレーヤー、文筆家、大学講師。1963年千葉県生まれ、歌舞伎町在住。これが本書の著者の一般的な紹介であろう。

本書は、同氏がファッションニュース誌で行っている連載及び同氏による2008年春夏のパリコレクションのルポ（ショー音楽家に対するインタビューを含む）から構成されている。

連載ではファッションショーで使用された音楽とそのメゾンの服との関係性の考察が行われており、この考察自体非常に魅力的である。しかし、私にとっての本書の一番の魅力は、同氏が2008年春夏のパリコレクションを取材するに至った過程である。

冒頭の紹介のように、同氏の本業は音楽家であり、ファッションについては門外漢である。しかし、同氏は幼少の頃にパリコレクションの映像に接して以来、その魅力に取り憑かれ、服飾文化（特にファッションショー）に強い憧憬を抱くに至った。本書では文章それ自体のみならず、その行間からも服飾文化に対する

同氏の過剰なまでの愛情が感じられる。そしてこの愛情は、同氏の音楽的見地からの考察に異様な説得力を与える。連載の熱量が増加するに伴い考察に用いる資料も充実し、当初はスナップ写真及びショー会場の録音のみであったものがショーの未編集VTRとなり、さらには、菊地氏自身によるショー会場での取材も実現する。そして、終には2008年春夏のパリコレクションの取材（ショー音楽家に対するインタビューを含む）に至るのである。

私は、本書を読み進めることにより、いつしか同氏が持つ服飾文化への愛情の一片を共有するようになり、憧憬の世界への接近の喜びと（憧れの人物と実際に会う際に生じる）恐れを迫体験することになった。音楽家としての専門知識と、過剰なまでの愛情を武器にファッション界に切り込んで行くその過程は、極めてスリリングで魅力的であるとともに、今後の自分の仕事のやり方においても参考とすべき実例の一つとなった。